

「新潟ダルクの困難は回復に向けた試練」

北信越地方の拠点地域ながら、ダルク未設置だった新潟県。家族会の活動が先んじているが、当事者にはなかなか救いの手が届かない。そのため、人知れず孤立を強いられ、もがき苦しむ薬物依存症者やその家族らにとって、新潟ダルクは大きな福音となるはずだった▼その新潟ダルク開設の取り組みが、地元の反対運動により、計画予定地での開設が困難な事態に追い込まれている。ダルク関係者にはなじみの「ハイヤーパワー」は移り気で、遊び心が過ぎるようだ。新潟の地に、ダルクはまだ早すぎるのだろうか？▼翻って、日本に薬物依存症ケアの歴史を切り開いてきたダルクも、都内に第1号が誕生してはや四半世紀。今や全国に50カ所以上に増えた。メディアで数多く取り上げられても、相変わらず非行や犯罪者の集まる怖い施設という視線が根強い▼今回のように、いざ自分の地元でダルクができるとなると、住民による強固な反対運動にさらされる。関係者らによると、積極的に地元テレビの取材を受け、地域の理解を得ようとした“正攻法”の取り組みが、悲しいことに結果的にあだとなった▼反対の理由は、ダルクの進出は地域の生活環境に悪影響を及ぼすという主張。例によって「必要性は分かるが、ここには困る。つくるなら、よそにつくれ！」の総論賛成・各論反対。まるでDNAにすり込まれたような排外意識に根ざしているように思える▼ごみ処理施設などと同じように、住民にとってダルクは迷惑施設の一つにすぎないという厳しい現実を思い知らされる。理屈を超えた、地域住民の無意識に近い悪感情の表現だ。住民にとってダルクは、依然としてどこの馬の骨か分からない怪しい集団なのだ▼でも、危険で怪しげな団体や組織は地域にほかにもある。素朴に思うのだが、金看板を掲げている広域暴力団の組事務所。まちなかにあって、トラブルや抗争事件が起きる可能性が高いだけに、真っ先に排斥運動が取り組まれていいはずではないか▼自分たちの身に危険性が及ぶ深刻な現実を考えれば、住民は待ったなしで追い出すパワーを結集すべきだと思うが、高をくくっているのか、腹をくくっているのか、どこも腰は重い。住民が命を引き替えにするほどのリアリティーはないようだ▼地元の反対運動で、二度も法人施設を阻まれた経験から、茨城ダルクの岩井さんは、新たなダルク開設には「いつの間にか住みついてしまう以外にない」と悲観する。静かに潜行し、住民が気がついたらダルクができていたというパターンだ▼でも組事務所に比べたら、はるかにダルクの方が安全で安心できる施設のはずだ。住民のダルク反対運動は、どうにもちぐはぐに思える。密かに隠れ住む形ではなく、堂々とダルクの看板を掲げる試みを続ければ、必ずやハイヤーパワーは光を与えてくれるだろう。

(市)

※筆者プロフィール＝市毛勝三（いちげ・かつみ）元地方紙記者。現在はフリージャーナリスト。ダルク支援者の一人で、薬物依存症問題などをテーマに据える。著書に「漂流の果てに」「我ら回復の途上にて」「少年犯罪論」など。コラムは随時掲載します。